

平成19年 9月28日
水稲作況委員会

水稲作況委員会（第3回）の意見

1 9月15日調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

(1) 8月中旬以降、気温はおおむね平年を上回って推移しているものの、日照時間は8月下旬以降、一部地域を除いて平年を下回って推移している。

また、9月に関東から東北、北海道を縦断した台風第9号や台風第11号の影響により活発化した秋雨前線の影響により関東地方から東北・北海道地方では大雨の一方、中国・四国地方や九州地方では少雨傾向で推移している。

今後の天候の見通し(9月21日発表の気象庁1か月予報)では、全国的に気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少なく、日照時間は平年並みか多いと予想されている。

(2) このような気象の予報からすると、穂数・もみ数が平年並みから平年を下回る中での登熟については、おおむね順調に推移するものと見込まれるが、高温やこれまでの日照不足が粒の充実や乳白粒の発生等品質に与える影響が懸念される。

また、9月の台風や大雨により浸・冠水等の被害が発生した地域では、登熟の抑制や品質への影響が懸念される。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

次回(10月15日現在)の調査に当たっては、以下の事項が収量に及ぼす影響を適切に反映する必要がある。特に(1)、(2)及び(3)については、相互に関係するので、その点に十分留意する必要がある。

- (1) 全もみ数が少ないことによる登熟への補償作用の程度
- (2) 登熟期間の高温・少雨が登熟や品質に与える影響
- (3) 8月下旬から9月上旬にかけての日照不足が登熟や品質に与える影響
- (4) 台風等による倒伏や浸・冠水の被害による品質低下やコンバインロスの状況
- (5) 斑点米カメムシ類やトビイロウンカ等の病虫害による品質への影響

【参考】

水稲作況委員会委員

(座長) 畑 中 孝 晴	(社)農林水産先端技術産業振興センター顧問
秋 田 重 誠	滋賀県立大学環境科学部教授
黒 田 栄 喜	国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授
山 川 修 治	日本大学文理学部地球システム科学科教授
丸 山 幸 夫	国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授
近 藤 始 彦	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長
米 本 博 一	全国農業協同組合連合会常務理事
馬 場 利 彦	全国農業協同組合中央会農業対策部長
安 藤 勲	全国米穀販売事業共済協同組合常務理事

平成20年 9月26日
水稻の作柄に関する委員会

水稻の作柄に関する委員会（第4回）の意見

1 9月15日調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

(1) 北日本を中心に8月中下旬に低温・日照不足となったものの、9月に入ってから全国的に天候は回復し、高温・多照に推移している。

一方、9月18日から20日にかけては台風第13号が日本付近を通過し、九州南部から太平洋沿岸の各地に大雨をもたらした。

今後の天候の見通し(9月19日発表の気象庁1か月予報)では、全国的に気温は引き続き平年より高く、降水量は平年よりやや少なく、日照時間は平年よりやや多いと予想されている。

(2) このような気象の予報からすると、登熟については、おおむね順調に推移するものと見込まれるが、8月中下旬に低温・日照不足となった地域における登熟への影響や、登熟期の高温による胴割米や腹白米、カメムシ被害による斑点米の発生による米の品質低下が懸念される。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

次回(10月15日現在)の調査に当たっては、以下の事項が収量に及ぼす影響を適切に反映する必要がある。

(1) 8月中下旬の低温・日照不足が作柄や品質に及ぼす影響

(2) 登熟期の高温や斑点米カメムシによる品質への影響

(3) 台風第13号の風水害による倒伏や作柄・品質への影響

(4) 今後の台風が作柄・品質に及ぼす影響

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

(座長) 畑 中 孝 晴 社団法人農林水産先端技術産業振興センター顧問

秋 田 重 誠 公立大学法人滋賀県立大学名誉教授

黒 田 栄 喜 国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授

丸 山 幸 夫 国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授

近 藤 始 彦 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長

長谷川 利 拡 独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域主任研究員

諸 岡 浩 子 気象庁地球環境・海洋部気候情報課調査官

米 本 博 一 全国農業協同組合連合会常務理事

築地原 優 二 全国農業協同組合中央会農業対策部長

安 藤 勲 全国米穀販売事業共済協同組合常務理事

水稻の作柄に関する委員会（平成21年産第3回）の意見

- 1 9月15日調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響
 - (1) 8月中旬以降、日照は、おおむね全国的に回復し、平年並みか多照で推移している。

平均気温は、8月下旬から9月中旬にかけて、北日本及び東日本では平年を下回り、西日本ではおおむね平年を上回り推移している。

今後の天候の見通し（9月25日発表の気象庁1か月予報）では、東日本と西日本の気温は平年より高く、日照時間は全国的に平年並みに推移すると予測されている。
 - (2) 本年の水稻は、7月中旬から8月上旬にかけての日照不足等により、もみ殻の大きさ等への影響が懸念されるが、このような気象の予報からすると、今後の粒の肥大・充実はおおむね順調に進むと考えられる。
- 2 次期の調査（10月15日現在）に当たって留意すべき事項
 - (1) 7月中旬から8月上旬にかけての日照不足等が、登熟や品質へ及ぼす影響に留意する必要がある。

なお、全もみ数が少ない地域においては、9月以降の好天による登熟への補償作用の程度を見極める必要がある。
 - (2) 8月下旬以降、北海道等気温が低めに推移している地域においては、収穫の遅延等による登熟や品質への影響を見極める必要がある。
 - (3) 稲体が軟弱徒長傾向のため、倒伏、ウンカ、カメムシ等の病害虫による登熟や品質への影響に留意する必要がある。
 - (4) 今後の台風及び集中豪雨による作柄・品質への影響に留意する必要がある。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員・専門委員

- | | | |
|--------|-----------|--------------------------------------|
| (座長) | 染 英 昭 | 財団法人中央果実生産出荷安定基金協会副理事長 |
| | 秋 田 重 誠 | 公立大学法人滋賀県立大学名誉教授 |
| | 黒 田 栄 喜 | 国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授 |
| | 近 藤 始 彦 | 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所稲収量性研究チーム長 |
| | 長 谷 川 利 拓 | 独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域主任研究員 |
| | 丸 山 幸 夫 | 国立大学法人筑波大学大学院生命環境科学研究科生物圏資源科学専攻教授 |
| | 山 岸 順 子 | 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場准教授 |
| | 渡 辺 典 昭 | 気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官 |
| (専門委員) | | |
| | 馬 場 利 彦 | 全国農業協同組合中央会農業対策部長 |
| | 米 本 博 一 | 全国農業協同組合連合会常務理事 |
| | 安 藤 勲 | 全国米穀販売事業共済協同組合常務理事 |